

シンポジウムのまとめに代えて

MAKINO, Eiji / 牧野, 英二

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of Hosei Society for Philosophy / 法政哲学

(巻 / Volume)

2

(開始ページ / Start Page)

102

(終了ページ / End Page)

104

(発行年 / Year)

2006-05

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007919>

濱田義文先生追悼シンポジウム

シンポジウムのまとめに代えて

司会者 牧野 英二

本日の追悼シンポジウムの主旨は、開始時に確認したように、「濱田先生の学問研究について振り返り」、「濱田先生が生前の研究活動のなかで保持されていたトポス（論点）を多面的に展開し、そしてそれらがどのような仕方で継承され、またされるべきかということを立て的に明らかにする」ことにあつた。五名の会員による個別発表、また多くの会員からのご意見や発表者との間の質疑応答などによって、濱田先生の研究業績や後進に残された学問的課題などが広範多岐にわたり明らかになったと思われる。文字通り、濱田先生の研究活動の多面性が照らし出され、その継承の必要性についても確認されたと確信する。長時間に及ぶ活発な報告と議論の成果から見て、主要な論点は、ほぼ語り尽くされたように思われる。

したがって、司会者から改めてこれまでの充実した議論を集約する必要はないであろう。それは、屋上屋を架す発言になりかねないからである。そこで最後に、締め括りとして濱田先生の重要な業績のなかでまだ立ち入って論じられなかった論点と、先生が遺された重要な研究課題について簡単に触れることで、司会者としての責を塞ぐことにする。

第一に、まず濱田先生の日本のカント研究における最大の功績は、イギリス・モラルフィロソフィーやフランス思想の影響、特にルソーとの関連などからカント哲学の成立史研究を体系的・総合的に研究された点にある、と言ってよい。先生の考察の狙いは、イギリス・フランスを中心とした比較研究によってドイツ哲学の思想的位置づけを相対化しつつ、影響作用史的観点からカント哲学の生成と構造、

発展の歩みを立体的に描き出そうとされたことにあったのである。この点は、他の追隨を許さない卓越した研究業績として特記されなければならない。

また、濱田先生のカント研究は、内在的な解釈方法を駆使して倫理学的研究から『純粹理性批判』、『判断力批判』、『永遠平和論』や『人間学』の領域などに徐々に領域を拡大され、成立史的研究から批判期思想の体系的の研究に歩を進められた点が指摘されなければならない。濱田先生の研究の進展は、研究対象であったカントの思想的展開の歩みとパラレルな関係にあった。しかもこれは、決して偶然ではなく、先生自身にとって必然的な歩みであり、その研究史的成果は、後進にとって多くの示唆と刺激とを与えたのである。

さらに『カント読本』（法政大学出版局、一九八九年）や『近世ドイツ哲学論考』（同上、一九九三年）などの編著やすでに言及されたカント関連の多数の翻訳書の翻訳・監訳などのお仕事による、日本のカント研究に対する基礎文献の提供と最新の研究動向の紹介などは、日本におけるカント研究の新たな展開にとって不可欠の役割を果たされてきた、と言わなければならない。言い換えれば、新たな研究の発展のためのいわば種蒔く人となり、木を植えた人の役割を引き受けられたのであった。

第二に、濱田先生が後進に遺された学問的課題について

触れてみたい。まず、カント研究に関しては、『純粹理性批判』中心の理論哲学的諸課題や『判断力批判』の美学論、自然目的論に対する研究が指摘できる。また、濱田先生の最後のお仕事のまとめとも関連するカントの意志の哲学の体系的な研究、さらに言えば、アーレントやペイナール、グリガなどの翻訳・紹介から立ち入って、彼らの仕事を媒介にしたカント哲学のアクチャリテートを明らかにするなどの課題が残されている。とりわけ、カントに内在的な研究とは別の立場からの、カント哲学の批判的継承の仕事がまず挙げられる。思想史的研究とともに、二十一世紀におけるカント哲学の意義は何かという今目的問いに答えることは、最も重要な哲学的課題に属するであろう。

さらに「近代哲学における人格の概念——ホッブズとロックの場合」（『倫理学論集・人格』理想社、一九七四年）、「近代イギリスにおける良心の概念」（『倫理学論集・良心』理想社、一九七七年）、「イギリス市民社会の倫理」（『倫理学論集・イギリス道徳哲学の諸課題と展開』以文社、一九九一年）などのイギリス思想研究論文は、ついに一冊の書物としてまとめられないままに残された。管見によれば、これらの論考は、たんにイギリス哲学・思想研究の成果としての価値にとどまるものではない。晩年の筆者は、ドイツ哲学への影響作用史的観点を考慮して、ハチスン、シャフツベリ、A・スミスなどの研究とともに、これらの個別

研究成果を新たな方法的視点から加筆・修正して体系的観点から纏め上げたいと考えておられたのではないか。この「計画」(？)が実現していれば、濱田先生のお仕事は、さらなる大きな展開を見せたのではないかと惜しまれる。

最後に、師の和辻哲郎研究に対しても、濱田先生は畏友の吉沢伝三郎氏『和辻哲郎の面目』(筑摩書房、一九九四年)の和辻論の刊行を十分に意識されておられた。和辻については、彼のカント解釈に対する濱田先生独自の批判的応答や、カントとヘルダーとの関係に対する弟子の立場からの別の解釈の可能性を本格的な論考で示そうと意図されていたのではないかと思われる。また、和辻哲郎の東大定年前に嚔咳に接する幸運に恵まれた濱田先生は、ご自分なりの和辻理解の全体像をいつの日にか一冊にまとめ上梓したいという秘めたる思いがあったのではないかと推測される。しかし、これらは晩年の濱田先生のご病気が許さなかったのであろう。すべては、後進に遺された研究課題となった。

いずれにしても、濱田先生の学問業績の意義や残された課題の大きさ・重さなどについて限られた紙幅で語ることには不可能である。それでも、本シンポジウムでの報告や質疑応答などを通じて、濱田先生の卓越した遺業の一端が明らかになったとすれば、追悼シンポジウム開催の意図・狙いは十分に果たすことができたかと確信する。この場をお借りして、シンポジウムの発表者、質問者、参加者の方々の

ご協力に深く感謝申し上げます。とりわけ、本シンポジウムの企画・編集に多大なご尽力を戴いた編集委員会の方々には、満腔の謝意を表する。